

---

# 真・恋姫†学園～夏目のドキドキ学園生活～

斬滅のザン＆食べられる野草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†学園〜夏目のドキドキ学園生活〜

### 【Nコード】

N8426R

### 【作者名】

斬滅のザン&食べられる野草

### 【あらすじ】

主人公の夏目<sup>なつめ</sup> 夜雲<sup>やくも</sup>は今年高校へと無事入学を果たし悠々自適な学生ライフを送っていた。そして五月も下旬になったそんな朝  
『真・恋姫無双〜夏候さん家の恩くん〜』の学園版が始まる。

プロフィール（ 3月 29日 設定追加）（前書き）

どうもザンです。

学園版のプロフィールです。

『真・恋姫無双〜夏侯さん家の恩くん〜』とは少し違う点がありますが、

それは学園版ですからww

プロフィール（ 3月 29日 設定追加）

名前：夏目 なつめ  
夜雲 やくも

年齢：15      性別：男

身長・体重：176センチ      67キロ

容姿：上の下（隠れたイケメン、良く見ないと分からない感じ）

【髪色】      ・黒髪

【髪型】      ・セミロングで片目を若干隠す感じ

【目の色】      ・茶色の目

性格：優しく人当たりが良く、動物や人が好き。

日向ぼっこが好きで、偶に授業をサボって屋上で寝ている。

血液型：A B      一人称：オレ

所属：フランチエス力学園高等部

好きな食べ物：料理全般

好きな物：動物、晴れ

趣味：昼寝、散歩

特技：運動、弓術

大切な物：友達、食べ物

苦手な物：勉強、我が儘な人

#### 備考

生まれて直ぐに両親はすでに他界。そのため今の夏目家へと養子として引き取られる。

中学2年に上がると同時に『洛旬寮』へと入る。

家族構成：実の両親は他界

養親（母親、父親）

養親の実の子（双子の姉妹）

## プロローグ（前書き）

どうもザンです。

短いですが、それだけですw

では本編です。

## ブローグ

ジリッー！！ ジリッー！！

「……ん……ん……」

デジタルの目覚まし時計がけたたましく鳴り響きいつも迎える朝。目覚ましを止め、デジタルな数字を見遣る。

5月20日（金） 7：56

大きな2階建ての一軒家丸々寮に住むフランチェスカ学園高等部1  
Bの夏目<sup>なつめ</sup>夜雲<sup>やくも</sup>、ことオレは108号室の自慢のモダンスタイル  
の自室のベッドで目を覚ました。

「ふあゝ……ねみい……」

オレは1階に設置された洗面台で寝ぼけ面を洗い、寝癖を直し、自  
室に戻り制服を着て、食堂に向かう。

「はよゝつす」

片手を上げて食堂に入るとそれぞれ挨拶を返してくれる。

「…やくも、おはよう……むぐつむぐつ」

メシでパンパンの口で挨拶してくれるのは、高等部1 Bの紅呂<sup>しんろ</sup>恋<sup>れん</sup>。基本的に無口無表情だが、感情表現が上手くないだけであって、決して感情が無い訳ではない（事実、恋の笑顔写真が学園内で高額取引されている…と言う噂がある）。大食漢で動物が好き。部屋は101号室。

「おはようなのです、夜雲殿！」

元気よく挨拶を返してくれたのは、高等部1 Bの公宮<sup>くみや</sup> 音々音<sup>ねねね</sup>。恋の従妹で恋（とオレ）を敬愛しており、大抵は一緒に行動している。その身体に似合わずアクロバティックな技が使える。得意技は、空中からの蹴り『ちんきゅーきつく』。部屋は102号室。

「おはようございます、夜雲さん」

柔らかい微笑みで挨拶をして来たのは、高等部1 Cの董間<sup>とうま</sup> 月<sup>ゆえ</sup>。そのお淑やかさを体現したかの様な仕草・振る舞いはとても様になっている、それ故に多くのファンがいて、ファンクラブ（非公式）が中学校時代から存在。部屋は105号室。

「全く、遅いわよ」

開口一発から文句を言うのは、高等部1 Cの賣上<sup>かがみ</sup> 詠<sup>えい</sup>。月の幼馴染で月のことを大事に思っている。いつもツンツンして高圧的な態度だが、ドジな一面を持つ。部屋は104号室。

「おはようさん、夜雲」



ジンジャーエールを飲んでいるのは、高等部1 Cの尾張<sup>おわり</sup> 霞<sup>しあ</sup>。武道部・馬術所属。関西弁で猫の様なフリーダムな性格で若干百合が入ってる…かもしれない。部屋は106号室。

「遅いぞ、夜雲。全く遅刻したらどうする気だ」

凜々しい声で遅刻の心配してくれるのは、高等部1 - Cの華藤<sup>かとう</sup> 真<sup>まこと</sup>。霞と同じで武道部所属。自分の武に自信を持っているが、良く決闘を申し込んで負けている。正義感が強く、よく人の手助けをしている事が多くの人に見かけられている。部屋は107号室

「おはよう、夜雲君」

このにこやかな声で挨拶してくれるのは、寮の管理人の黄瀬<sup>きせ</sup> 紫<sup>し</sup>苑<sup>おん</sup>さん。この寮、『洛旬寮<sup>らくしゅんりょう</sup>』の提供者。母性溢れる雰囲気でおレ達の母親的存在。母子家庭で苦労している。

「おはよう、夜雲お兄ちゃん！」

紫苑さんに続き元気の良い声で挨拶してくるのは、黄瀬<sup>きせ</sup> 璃々<sup>りり</sup>ちゃん。紫苑さんの唯一の愛娘。この学園の幼等部に通っている。

ちなみに紫苑さんと璃々ちゃんは、寮の隣にある自宅に住んでいる。それと月曜日から金曜日は紫苑さんが朝食を作ってくれるし昼は言えば作ってくれる。だが土日は

「はい、朝食ですよ」

「あざーす！ いつもいつもすいませんねー」

オレはにこやかに笑いながら、お礼を言う。

「いいのよ、良く璃々の送り迎えや遊び相手をお願いして頂いてい  
るのですから」

頬に手を添える様にしてにこやかな笑顔で言う、紫苑さん。

「いえいえこちらこそ感じてですよ。それに、母親一人じゃ何か  
と不便ですから、男手は必要でしょ。これからも頼ってください」

「ふふふっ、そう言っていたけると嬉しいわ」

もともとオレは子供が嫌いではない、どちらかと言えば好きな方だ。  
近所の子供とは偶の日曜日に遊ぶくらいに好きだ。

「任せて下さい！ んじゃいただきますぐえっ！？」

「何してんのよ、食べてる暇なんかないわ！ さっさと行くわよ！」

オレは詠によつて強制的に”食べ物への感謝”を中断された。襟元  
を引っ張られ変な声が漏れる、そのまま引き摺られてしまう。

これからオレの愉快な？日常が始まった。

「うぁーオレの栄養源がー……」



## プロローグ（後書き）

えーまあゆつくり更新しますんで、よろしく願いします。

是非とも感想・アドバイスなどあれば宜しく願いします。

ではまた次回。

# 1日目 朝ごはんはかならず食べる！（前書き）

どうもザンです。

なんだか部活から帰って直ぐに寝てしまった者です。

最近は部活に行くのも辛いですねww

まあこれは置いていて、では本編です。

## 1日目 朝ごはんはかならず食べる！

オレは朝飯を食いつばぐれ、体に力が入らないまま電車で揺られる。

オレ達が暮らす”洛旬寮”<sup>ロクシュンリョウ</sup>は全部で8部屋。1階が女子6部屋、2階が男子2部屋（もう一つの部屋は建てつけが悪いらしい）。食事は大抵は1階にある居間でみんなと一緒にとる。紫苑さんは月曜日～金曜日まで朝食と夕食を作ってくれる。

「は、腹減った……」

電車で揺られること15分程度、オレ達が通うフランチエスカ学園都市  
元は学園だったのだが現校長より4代前ぐらいの人が学園都市として国からの特許を所得している。

幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた都市。これらの学術機関を総称して「フランチエスカ学園」と呼ぶ。

一帯には各学校が複数ずつ存在していて、都市機能を含め、大学部の研究所なども同じ敷地内にある。敷地面積はバカに広い（新学期初めには迷子が出るほど）。そのため、学園内をブラブラと散歩す

る部「さんぽ部」というものがあつたり、クラス連中でも何人かが所属している。

多くの生徒が在籍していることもあって、毎朝の通学ラッシュは鉄道・道路ともに大混雑を極め、たくさん生徒たちが駆け足で登校しているシーンは朝の名物だったりする。

「全くうるさいわね、さつきから」

昇降口前に来るとオレの「腹減った」発言がうるさいのか詠に一喝される。

「詠は知らないんだよ、朝メシを抜いたら人は死ぬんだよ？」

「そんな訳ないでしょ」

オレ達は今フランチエスカ学園高等部の門へと一直線に向かう桜並木道を歩いている。

「あの、良かったら私のお弁当、食べますか？」

「…月、いやっ月様……君はマイエンジェルだ！」

オレは感動のあまり月の手を握る。

「そ、そんな……へう……」

「月に何してんのよっ……！」

詠の必殺の一撃、回し蹴りがオレの腹部へ、さらに拳がコメカミへ

と叩き込まれる。オレは、咄嗟の事で対応できず吹き飛ぶ。

「ぐはっ！ー！」

「え、詠ちゃん！」

「ちょっ、やり過ぎやで、詠っ！」

「見事な蹴りだな、賈上」

「…やくも、ぶじ？」

「夜雲殿ー！？ お、お怪我はありませんかっ！？」

真と詠以外はオレの事を心配してくれた様で、こっちに駆け寄って来る声と足音が聞こえる。

……ねね、ケガしてない方がおかしいって、あれ？ ケガしてない、ふっしーぎー…

「お、重い一撃だ……だが…何とか無事だ……」

目一杯のやせ我慢をしつつ、よろめきながらもオレは起き上る。

伊達に”地獄の訓練”に耐えたオレじゃねえぜ……

「…足めっちゃ震えてるで？」

「む、武者震いってヤツだ、気にするな……」



「そうか？　ウチには、生まれたての小鹿って方があつとる気がするで？」

霞がオレの落ちた鞆を拾いながら言う。

「大丈夫なんですか？」

「問題無い…行こう、そろそろHRが始まっちゃう」

オレはフラフラな足で昇降口へと向かう。

教室までは恋とねねが支えてくれてやっと席に着いた。それと同時に教室前方のドアが開き、二人の女性が入ってくる。

「おはよう。出席を取るから返事をするように」

挨拶をすませ出席確認するのは、周善寺しゅうぜんじ 冥琳めいりん。新任教師で初の担任を任せられた黒髪褐色美人教師、と学園内では意外に有名。

「はい。みんなおはよう。今日も一日がんばる」

ムードメーカー的な存在で、我がクラスの副担任である孫美まこみ 雪蓮しうれん。

孫美家の長女で自由気ままな性格。冥琳の悩みの種。こちらでもまた学園で有名。

2人はオレの母親の友達2人の娘さんで、幼い頃から一緒に遊んでいた、言わば幼馴染。ちなみに2人共20代前半弱で彼氏なしらしい。

「うむ、全員いるな。今日は特に連絡事項はない、今日も勉学に励むよう」

「それじゃ、体育の時間にね」

と2人はHRを終え教室から出て行ってしまった。

「ようやく治まった……」

オレは震えの治まった足をさすりながら机に伏せる。

「……やくも……」

「大丈夫ですか？」

すると恋とねねが机の端に手をかけ覗く様にオレの視界一杯に顔を出し、心配そうに見詰めて来る。

「おはようー夜雲くん」

「おはよう、夜雲」

「どうしたんだ、夜雲？」

「ふふつ、私が介抱してやろうか、夜雲？」

オレに声を掛け来たのは、個性的なクラスメート達（女子）。

まあ上から紹介と行こうか、まずは……

劉<sup>みずき</sup> 桃香<sup>とうか</sup>。幼等部からの付き合いで、将来凄い事をしそうな娘<sup>こ</sup>、普段から天然ボケの面が目立つが、意外に頑固な一面も持つ。調理部所属で良く料理を焦がしてるとか。

次に、関羽<sup>せきば</sup> 愛紗。同じく幼等部から一緒に、委員長気質、委員長の中の委員長……とまでは行かないが、まあクラス委員長。武道部所属で全国大会上位ランカー、成績優秀、品行方正、で才色兼備の化身、料理で人が殺せる必殺調理人。

んで、馬淵<sup>まぶち</sup> 翠<sup>すい</sup>。中等部2年から一緒に、熱血スポーティー少女、頭がちよつと悪く単純なのが玉に瑕。武道部・馬術部所属で両方とも全国大会上位ランカー。男勝りだが恥ずかしがり屋。

そして最後に、竜雲寺<sup>りゅううんじ</sup> 星<sup>せい</sup>。小等部5年からの一緒に、メンマ大好きヒーロー少女、人をからかうのが趣味特技。武道部・さんぽ部<sup>くも</sup>所属、武道ではまたまた全国大会上位ランカー。掴みどころのない雲<sup>くも</sup>の様なヤツで偶にエロくなる。

「……おう……ちよつと、朝食くえなくて……な。それと星、どっか行け……」

オレは何とか起き上がり、椅子の背もたれにもたれ掛かる。

「おやおや、連れませぬな」

何が可笑しいのわからないが、喉を鳴らして笑う星。

「…うつぜー」

オレは心の底から嫌そうな顔をして星に言う。

「ひどいですなあ」

「それで、大丈夫なのか？」

「…あー……3時間目に成仏…」

「孫美先生の体育か……真面目に受けても真面目に受けなくとも、か……」

愛紗は顎に手を置きながら思案顔になる。

「確かに、孫美先生は体育”だけ”は真面目にさせるからな」

”だけ”を強調する翠。

「うん、そうだねー、私には激しいから辛いよー……あうー」

思い出したように顔が少し青くなる桃香。

「アレぐらいが普通な気もするのだから？」

星は真顔でそんな事を言う。

「アレが普通って…星ちゃん…」

「流石にアレは普通じゃねーだろ、まああたしとしてはアノぐらいが丁度良いけど」

「丁度いいってのも変だと思っよ、翠ちゃん…」

「まあ最悪、昼を食べるしかないだろ」

愛紗はもっともらしい言葉を言うが、もっとも無理な発言をする。

「愛紗よ、夜雲は学食派だぞ…」

「うう、そうだったな」

「しかも学食が開くのは、4時限目の休み時間……どうもあっても難しいな……」

するとそこで1時限目を告げるチャイムが鳴る。みんなオレに励ましの言葉を残し、それぞれ自分の席へと戻っていく。

ようやく2時限目を終えた休み時間、オレは机に伏せたまま動け

ない状態だった。

「……め……めえ……しい……」

もはや亡霊の様な声でごはんを求めていた。

「うわっ、もうお化けになってる……」

「これは危ないですな。保健室に連れていき、女性特有の介抱をすべきですな」

「女性特有の介抱？」

「さよう。こっ胸をつかつて……」

「せ、星！ 卑猥だ！」

「冗談ではないか」

「お前は冗談が分かりにくい発言を控えろ！」

色々と聞こえるがオレは顔を上げる事さえできない。だがオレの席近くは賑やかな事この上ない事は分かった。

「……やくも、食べる……」

恋の声がすると、唐突にオレの首が持ち上げられ口に何か詰め込まれる。

「！？ ……むぐっむぐっ……」

むっ…これは、パン？ あ、ソーセージとレタス、それにマスタードとケチャップ…って事は……

「むぐっ…んぐっ……ホットドッグ…」

「……せいかい……」

こくこく頷きながら恋は持っていた実物を見せる。

「どうしたのこれ？」

「……一刀に…もらった……」

「あー…一刀かー、良く持ってたなアイツ。確か……Aクラスだったっけ？」

「……ん……はい……」

恋はホットドッグをオレの口にまた突っ込む。オレはそれをひたすら咀嚼する。どこかオレを射殺す様な視線がオレを襲うが、恋とのこの空間では無効になった。

「…ありがと、恋」

「……ん」

恋は照れたように微笑む。すると丁度チャイムが鳴り、教師が入ってきて来る。するとオレの本能に呼び掛ける様に警報音をけたたましく鳴り響かせている。そして比例して数人の女性が黒いオーラ系の物

を発しているが、気にしない事にしよう。

授業中はずっと物凄い殺気を背中や肩、はたまた心臓にも感じながら受けたためか、汗が止まらなかった。

「はい、それじゃー張り切って行こうー」

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお！！！！！！！』

約40人強の男子は雄叫びにも似た歓喜の声を出す。オレ達は体操服に衣装チェンジして外で体育を始める。

「つたく、うぜえ男子どもだ…」

そうなぜこんなにもうるさいのかと言うと、女子はブルマと言う、世界を探してもココだけの服装だからである。それに雪蓮が教師にあるまじき露出度の高い服を着ているからでもある。そんな訳だ。



ったく何が嬉しいのかわからん。

「……やくも……一緒に組む……」

オレはボーッと雪蓮に群がっている男子の人垣を離れた場所で軽蔑の目で見てみると、恋がオレの体操服の裾を引っ張る。

「……組む？」

「……ん」

組むって言われても何をだ？

などと思っ居ると、恋の手を引っ張り1つの集団へと連れて行かれる。

「来たか」

そこにはブルマー姿の桃香、愛紗、翠、星、ねねそれから。隣のクラスのAクラスの

「ういーっす、やくぴー」

「おはよう、夜雲。朝は大変だったらしいな」

「全くダラしないわね」

「夜雲ー！」

「あ、姉者、落ち付けここは学校だ！」

んじゃ上から……

及川。<sup>おいかわ</sup> 変態、節操皆無、二つ名はエロの御遣い。

爽やかスマイルで男までも虜、と言う噂がある、北郷 <sup>ほんごう</sup> 一刀 <sup>かずと</sup>。武道部所属で腕は中の中。オレの中学からの付き合いで親友のポジションを欲しいままにした男。

呆れ気味に腰に手を当てながらため息を吐く、曹乃崎 <sup>そのざき</sup> 華琳 <sup>かりん</sup>。容姿端麗、学業優秀、運動万能、才色兼備の言葉が似合う未来の生徒会長候補。オレの幼馴染で昔から1番つるんでいた人物。実家は旧家で日本ではかなり有名。

発狂気味に暴れるのは、夏目 <sup>なつめ</sup> 春蘭 <sup>しゅんらん</sup>。華琳の護衛？らしい。運動万能で武道部所属の全国大会上位ランカー。華琳の家に仕える守護者の家系の長女。そしてオレの戸籍上の姉である。

そしてその春蘭を羽交い絞めにいるのは、夏目 <sup>なつめ</sup> 秋蘭 <sup>あきらん</sup>。春蘭の双子の妹。才色兼備、学業優秀で武道部所属で全国大会上位ランカー。双子の姉である春蘭には外見も中身も似てない。戸籍上の二人目の姉。

「なあ……今酷い事言われた気がするんやけど？」

「そんなワケねーだろ」

「うーん……」

「それより、どう言うことだ、恋に組むって言われたんだが？」

首をひねる及川を無視して華琳になぜこの状況なのか聞く。

「は？ 貴方、聞いていなかったの？」

「何をだ？」

首を傾げながらわからないと言った顔をする。

「つまりだな」

すると一刀が懇切丁寧にわかり易く教えてくれる。

つまるところ、今から行われる球技は選択制でサッカー、バレー、テニス、野球の4つから選択して、その別れた競技をやるらしい。そしてその競技の時チームを別けるらしく、その組み合わせを決めるらしい。

「おkおk、了解した。んじゃ、オレは恋達と組むんだな？」

「そんな訳ないでしょ、あくまで彼女は要望を言っただけよ、まだ決まってないわ」

「そうなのか？ んじゃサッサと決めちまおうぜ」

するとなぜかその場にいる女子の目つきが変わった。

「夜雲、当然私達と組むわよね？」

「わ、私達とだよね？」

「やくも、恋達と組む」

いっぺんにオレに詰め寄る3組のグループ。だがこの3グループと組めば確実に何か嫌な事になる、と自分の中の第六感が告げていた。

「……………一刀、及川組むぞー!!」

「え？ あ、ああ、いいぞ……」

「なんや、やくぴー意気地なしやなー」

「……………屋上から落とすぞ……」

オレは魔法の言葉を及川に満面の笑顔で言う。この屋上から落とすぞ、は中学の時に氣にくわない奴（カツアゲする奴、ケンカふっかけて来る奴 e t c）を紐を両腕両足に縛って落とした事があるからだ。

「すみませんしたー!!」

及川はジャンピング土下座をきっちり決める。この及川もその犠牲者（試運転の初搭乗者）だったりする。

「んじゃ、オレ決まったから……………って恋、そんな目されても無理だからな……………」

「……………ちい、え……」

可愛い舌打ちをする、いやむしろ舌打ちですらない、がそこが可愛

いと思えるぜ。

「ま、まあ恋とねねぐらいなら良いんじゃないか？ ほら人数も2人だけだし、丁度5人になるし」

とそこで助け舟を出す一刀（と言う名のお人よし）。

「お人よしは余計だ！」

「地の文を読むな、しかも最高難易の（）部分まで読むな。まあいい……まあ恋とねねだけならいいか……んじゃ恋とねねはこっちのチームな」

「……一刀、ナイス……」

「今回は褒めてやるのです」

「あ、あははは……」

なぜか一刀にサムズアップする恋と上から目線のねね。その一刀を睨む他の女子グループ。そして何故か汗をダクダク流す一刀が居た。

「んじゃ、始めるか……」

そしてオレ達は各チームに別れて準備運動をしてから選択球技のバレーをするために体育館へと向かった。



1日目 朝ごはんはかならず食べる！（後書き）

うーん、いい感じの苗字が思い浮かばないなー……

まあそんな感じで頑張って書いています。

ではまた次回。 ノシ

## 2日目 昼休みは屋上だね！（前書き）

ういうい、どうもザンです。

サブなんで結構遅いですが、まあ見逃して下さいw

では本編です。



## 2日目 昼休みは屋上だね！

午前の授業をようやく消化し終えた昼休み。休み時間の比ではない程の騒がしい学食では無く、とても静かな屋上へとやって来た。

「っっ　　っっ　　」

口笛を吹きながらいつものお決まりポジションである屋上の中央に位置する場所に座る。そして学食の横にある購買で買って来たパンを啜える。

「よし、誰も来てないな。これでオレの平穩は保たれる」

そう言つてパンを一口食べる。いつもこの時間は大抵はクラスのメンバーが居たり、月や詠それから霞に真といった連中と昼を食べる（強制的）のだが、今回は上手くまけた様だ。

「……何をしている？」

「何ってメシを食おうとおもつて、何でお前がここに居るんだよ！」

そこにはいつの間にかオレの横にさも当然と言わんばかりに、黒髪のシニヨン（お団子）ヘアと春なのに黒いマフラーがトレードマークの褐色娘、甘城あましろ 思春ししゅん。クラスは1-D。武道部所属。急に現

れては消える忍者の様な技を軽々とやって退ける様な女の子。実は忍者の家系なのでは？という噂さえある。

「お前は急に出てくるな！ 心臓に悪いんだよ！」

「知るか、貴様の心臓など……」

「まったく……んで、今日はどうしたんだ？」

この頃、ここに来るとほぼ毎回思春に合う、されに何かとオレの悩み事を聞いてくれるいい奴だったりする。

「お猫様」

だが今回はほかの目的があるらしい。なんせこの「お猫様」とか言ってるヤツが居るのだから。

「……………また来てるのか……………」

「ああ、ここが良いスポットらしい……………」

視線を動かすとオレの座る逆側にその姿はあった。小柄な体躯に長い黒髪、そして猫を見て悶えている彼女、周央<sup>すおう</sup> 明命<sup>みんめい</sup>。クラスは1-D、部活は不明。彼女も思春の様に消えては現れるを特技にしている、学内1の俊足を持っているらしい。猫を神の一種と勘違いするほどの猫至上主義の持ち主。

「あそこに居る、初代猫教祖様はなに用でここに居る……………」

「何でもお前に渡す物があるらしい……………」

渡す物？ はて、何か貰う物なんかあったか？

「ふーん……おい、明命！」

兎に角呼びかけて用事があるなら聞かなければと思い、明命に声をかける。

「ふえ？ あ、夜雲さん！」

おいおい、気付いてなかったんかい……

「どうしたんですか？」

するとオレに気付いた明命はオレの目の前に一瞬で来ていた。

「のわぁっ!？」

「はわぁ!？」

それに驚いて声を上げると明命も驚きの声を出す。

「……き、急に来たらビックリするだろ……」

「す、すみません！」

ペコペコと頭をなんでも下げる明命。この様にとても素直かつピュアな娘なのだ。

「そ、そんなに謝らんでいから。それより何か用があるんじゃない

のか？」

「あ！　そうでした、これを……」

そう言つて懷を探り出す明命。あれ？とかこつちだっけ？とか言つて慌てている姿はまさに”和”<sup>なごみ</sup>の一言に尽きる。

「…貴様……気持ち悪い目で明命を見るな……」

「あ、あは、あははははー………」

まあそんな目で見ればこの様に思春が何故かキレるので余り出来ないのだが。

ん？　待てよ……

「それじゃあ、思春なら良い訳？」

「……………」

なにっ！　沈黙だと！　沈黙は肯定とみな………していいのだろうか？

恐る恐る思春の顔を覗く、すると何故か顔を赤くして湯気のような物を頭から出していた。

「あ！　ありました！　これです！」

と言つてきやいきやいと嬉しそうに笑いながら手紙を渡して来る。

「ん？　ありがと。えーっと………」

貰った手紙に宛名は無いが可愛くデコレーションされていた。その手紙をおもむろに開けて中身の手紙の内容を見る。

貴様の一生は私が貰い受ける

( 。 。 )

( つ ) ゴシゴシ

( 。; 。 )

( つ ) ゴシゴシ

( 。; | 。 ) …?!

( つ ) ゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシ

( )

( ; ) …!

達筆でそう書かれていた。涙が零れそうな目頭を押さえてもう一度文章を見直す。

貴様の一生は私が貰い受ける

同じ文章でした。

（ 。 。 ） ポカーン

(  
(  
。  
。  
(  
(  
ア  
ワ  
ワ  
ワ  
ワ

(  
(  
(  
(  
。  
。  
。)  
)  
)  
)  
)

ガクガクブルブル

( ( ( ( ( ( ; . ) ) ) ) ) ) ガクガクブルブルガタ  
ガタブルガタガクガクガクガク

[illegible]

マジでなに！？ えっ！？ はっ！？ なんなのっ！？

オレ何したの――！！！！！！

混乱してゴロゴロとその場を転げまわる事数分。明命によつてようやく冷静になればオレはもう一度手紙を見る。

「この、貴様の一生は私が貰い受ける、ってオレ殺されるっ！」

「お、おおおお落ち着いてください！」

「そうだ、落ち着け、クールだクールになれ、クールだ………よし、まずはタイムマシーンを探すんだ……」

「夜雲さん落ち着いてくださいー！」

それからまた数分。

「おい、裏になにかまだ文章があるぞ……」

今にも悪魔召喚の儀式でもしそうに屋上に何かの儀式陣を書いている時、思春がオレに手紙の裏を見せて来る。

そして思春から手紙を受け取り表に書かれた物騒な事の書かれた紙の裏を見る。

あはっ      なんて嘘だよー……

「だらっしゃあああああああああああああ……！！！！！！」  
「！」

冒頭の文書を見て手紙を下へと叩きつける。

「怖すぎる文章かくんじゃねーよ！」

「お、落ち着いてください。続きを読みましょー！」

明命がオレの腰に抱きつき止める。

ぬ？ この感触は…… 慎ましかねむnあべぼん！？」

「……下種が……」

思春の攻撃がオレの頬を抉り吹き飛ばす。その一撃はとても重く、とても常人には耐えられざる攻撃だった。

さてそろそろ本題に戻ろう。

あはっ      なんて嘘だよー。最近、お嬢様が夜雲さんに会いたい  
会いたいと駄々をこねるので、そろそろお嬢様に顔を見せに来てく  
ださい。      七乃より？

P・S      最初の驚く姿はまさに格別でした

「お前は、知謀スキルの無駄遣いじゃ、ボケーEEEEEEEEEE!!!」

オレの怖がる様子はオマエには既に予測済みだったと言っのか！  
マジで才能の無駄遣いじゃ、ボケ!!!

このオレに手紙の送り主は、張ヶ谷<sup>はりがや</sup>七乃<sup>ななの</sup>。ある財閥の秘書兼メイ  
ド。頭は良いのだがその”知”を人を弄るために無駄に使うため、  
天然悪人と言われている。

「あの天然悪人め、オレを呼び出すたびにこんなモン使いやがつて  
……」

ふつつと沸き上がる怒りを抑えつつ手紙をポケットに入れる。



「……まあいい、最近はあるし行って無かったからな……」

と独り言を言いつつ手元のデジタル時計を見る。

「そろそろ時間になるな。明命、手紙ありがとな」

そう言つて明命の頭を優しく撫でる。

「はい！ えへへっ」

はうっ！？ カワエエやんけ！！

「思春もありがとな」

「  
……  
い  
ん  
……  
」

ついでに思春の頭も撫でて屋上を後にする。それから教室に着くと女性連中に正座させられ説教された。

「なぜじゃ――！！！！！！！！」



2日目 昼休みは屋上だね！（後書き）

うーむ、こんな感じでいいのかな？

まあいつか……さて次回は放課後ネタかな？

んじゃまた次回。 ノシ

### 3日目 バイトは楽しいもの！（前書き）

どうもザンです。

眠いっすw

まあ頑張っても無いですがねーw w

では本編です。

### 3日目 バイトは楽しいもの！

アレだけ面倒だった学校も終わりを告げた  
ヤムによって。

チ

「終わったー……んじゃ行きますか……」

「……ん」

「ハイなのです！」

放課後。現在の時刻で丁度3時20分ぐらい。フランチエスカは以外にも早く終わる学校でこの時間に終わる事は不思議ではない。

「アンタ達、遅いわよ！」

恋達と昇降口を抜け正門まで前まで来た、すると詠と月の姿が見え少し小走りで向かうと、詠に文句を言われる。

「しゃーねーだろ。HRが少し長引いたんだよ」

「それだつたら走つて来るとかしなさいよ!」

ガルルルと聞こえそうな剣幕でオレの胸倉を掴む。

「……………おい、ちけーよ……………」

「っ!?! ふんっ!?!」

「りゃなんしっ!?!」

詠の拳が鳩尾にクリーンヒットして仰向けに倒れ込む。

「…ごほっ、ごほっ……………い、今は……………やば…ヤバか、った……………」

「ふんっ!」

咽ながら上半身を起こす。詠はふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまう。

「もう、詠ちゃんたら。大丈夫ですか?」

「……………無事?」

「夜雲殿、大丈夫なのですか?」

「……………大丈夫だ…ありがとう」

月はオレの背中 of 埃を払いながらオレが起きるのを手伝ってくれる。恋とねねはオレの傍にしゃがみ込んで心配そうな目でコッチを見詰める。

なんて優しい娘達なんだ！ 頭を撫でてやろう。

「……ん」

「くすぐつたいですぞ……」

「そ、そんな事無いです……へう……」

それぞれ3人の頭に手を置き1回づつ撫でる、3人共嬉しそうにしたり、照れたりと可愛い反応をする。そのおかげで体は大分楽になった。だが

「月に触る                    なっ！！」

「つりやぶっ！！」

だが直ぐに顔が痛くなった。

フランチェスカ学園高等部の広い敷地を10分程度で抜け、しばらく欧州風の街並みの中を歩きながら目的地へと駄弁りながら向かう。

「それにしてもアンタ、今日の昼休みどこ行ってたのよ？」

すると詠が唐突に話題を変える。

「ああ、ちよつとな……」

なんとか誤魔化そうと少しぎこちない笑顔で笑って見せる。

「月と一緒に探しまわったんだからねっ！」

「痛い！ 地味に痛い！」

詠も深くは氣いて来なかったが、それでもかと言っぐらい怖い顔をしながら肘を抓られる。

「ふふつ、詠ちゃんも一緒に探してたんですよ」

すると月が天使の笑顔で口元を隠して笑い、少し嬉しそうに言う。

「なっ！？ あ、あれは月の為よ！ 勘違いしないでってニヤニヤするな！」

詠は月の言葉をどもりながらも反論する、途中でオレのニヤケ面が氣にくわないのか軽く蹴られる。

「……恋も、探した」

「ねねも探したのですぞ」

「ああ、すまんかった。ちよつと野暮用でな」



そう言つて貰つた手紙をポケットから取り出して軽くヒラヒラさせる。

「何よそれ？」

「袁道寺家のメイドさんからの催促だよ。美羽ちゃんが会いたいてさっ」

”袁道寺”

世界に誇る、超お金持ち

では無く。まあ日本の企業の御三家の1つである。多分野で軍事、商業、医療、政治など様々な分野で活躍している、事は確かである。そして、その袁道寺家と並び立つもう2つの家は、”曹乃崎家”、薊家である。

そしてその袁道寺家と所縁ある曹乃崎家とは浅からぬ因縁（とつても浅いのだが）があり、現在では競う形で日本は急成長している。

そしてそして、その袁道寺家次代後継者  
の従妹  
である、袁道寺美羽にオレは大変気に入られて偶に御屋敷に招かれる（今回みたいに手紙が主である）。

袁道寺美羽。小等部4年生、袁道寺家次代後継者の従妹。少し上から目線、我が儘お嬢様で友達が少な目だが、他人を思いやる心の優しい女の子。蜂蜜水が大のお気に入り（甘い物は全般的に好物）、意外に食通。

「ふーん。まあどうでもいいわよ、そんなの」

「お前から始まったじゃねーかよっ」

「うつさいわね。それよりもう着いたわよ」

そんな感じであつという間（ここまでに30分）に到着した目的地は

『アルモニニア Armonia』。Armoni

aはフランス語で調和と言う意味……らしい。外観はパリにある凱旋門通りにある様なオープンカフェ。

そんな場所でオレ達はバイトしている。

「ちーっす」

オレ達はそれぞれ軽い挨拶をしながら店内に入る。中は以外に人の数が少ない（8〜9人程）店内を確認してこの店のマスター（オーナーの知り合い）である、桔梗<sup>ききよう</sup>さんに挨拶する。

厳<sup>いずかし</sup>檜<sup>いずかし</sup> 桔梗。カフェ『アルモニニア Armonia』のマスター。剛毅な性格で

大抵の事は気にしない、腕っ節が強く、こちら辺一帯では「厳の姐<sup>あね</sup>さん」とか「厳<sup>げん</sup>さん」などと呼ばれている。基本に人には友好的でお酒大好き人間である。そして独身……らしい。

「おう、来たか。今日も宜しく頼むぞ」

ニカッと活きの良い笑顔を向ける桔梗さん。

なにっ！？ それだけで揺れるのkいててっ！

「夜雲、鼻伸ばしてる……」

恋はオレの耳を引っ張り拗ねた様に言う。

「恋殿、鼻の下ではないかと思うのです……」

とか言うねねもオレの手の甲を抓っている。

地味に痛い。

「はっはっはっ、それほど儂が魅力ある女だオトナと言っ事じゃ！」

「そこで笑ってないで、助けてくださいよ」

「そのくらい自分でなんとかせい」

そう言ってまた豪快に笑いながらお酒を飲む。

って……

「「酒を飲むなっ！」」

オレと詠の声が重なる。

アレからオレ達（恋・ねね・詠・月）はアルモニアの制服に着替える。オレの格好はウェ이터服、白いシャツに暗い黒色の蝶ネクタイに黒のベスト、黒のギャルソンエプロン（ショートバージョン）と言った普通のウェ이터服である。であるのだが……

「いらつしやいませお嬢様」

と何故か執事の様な事をさせられている。この服でこれは合わないのでは？とオレは女性陣（アルバイト仲間）に聞くと、何故かみんな鼻を押さえながらサムズアップをするか鼻を押さえどこかに行ってしまう。何故だろう？

しかももしか、オレは何故か『不良ウェイター』と言う、ウェイターにとっては不名誉であろう称号も有している事も言っておこう。

アルバイト初日にオレはガラの悪い6人組のクズ（客と呼べと言われたら、答えは否だ）をボコボコにして追い出した辺りでそんな称号を付けられた（桔梗さんから与えられた）。

そんなオレは今までこの店でアルバイトをしているワケだ。

「すみませんーん、注文いいですかー」

「あ、はい、今行きます」

そして今注文を取りに行った月が身に着けているのは、メイド服だ。大抵の男はここで興奮するだろうが、オレはそんな事は決して無い。なぜならオレは  
ウェイター服（女性バージョン）の方が好きだからだ。

まあ落ち着け、誰もメイド服が嫌いでは無いさ、ただウェイター服が若干オレの好みと言っただけだ。

月が身に付けているのは、髪を止める赤い紐のあるカチューシャ、膝下までのスカートそしてその上から肩にフリルのあるエプロン、

和服の帯の様にお腹辺りに巻かれた濃いピンク色のリボンが特徴的なメイド服。

詠は赤い紐が無いが可愛らしいカチューシャ、肩にフリルのあるエプロン、お腹辺りに巻かれたリボンここまでは月と同じだが決定的に違う、丈の短いスカート。

この二人は前世でもメイド服を着ていたんじゃないかって程に似合っている。

そして残り二人。

まずは恋。恋は、ウェイター服。黒の蝶ネクタイに白のシャツとオレと同じオーソドックスな上、下は黒いミニスカートとそれに合わせる長さの白いフリルのエプロン。

そしてねねは、いつものおさげをポニーテールの様に赤いビーズの突いたゴムで一括りにしている。後の服の細部は月や詠と同じ。

とまあこんな感じの服装でオレ達は仕事をしている。

「注文いいですか？」

「何なりとお申し付けくださいませ、お嬢様」

この口調はいまだに慣れたくは無いのだけけれど。

「お疲れしたー」

「おう、また月曜にたのむぞ」

オレ達は夕方6時半を過ぎた辺りでアルモニアを後にする。そして5人で駅へと向かう。

「それにしても今日も多かったわね」

「そうだね」

今日の客足に少し口を漏らす詠、それをちょっとため息について同意する月。

「恋…お腹減った…」

「そうですね、ねねもお腹が減ったのです」

恋とねねはお腹が減って居るのか元気が少な目だ。

「オレの比率がおかしかったのは何故だ……その所為で疲れたぜ。ふあゝ……」

オレも今日の客がオレばかりにオーダーをとる事に愚痴る。みんな

それぞれ話しながらゆっくりとした歩調で歩く。

「明日は休みだし今日はゆっくりできるわね。月、明日買い物行くんでしょ？」

「うん、買いたいお料理の本があつて、詠ちゃんも何か買っただけ？」

「うん、いろいろとね」

月と詠は明日どこかに出かける様だ。

まあフランチエスカで買えない物はないだろう。

「恋殿は明日もバイトですか？」

「……ん。犬のお世話」

恋は何故かもう一つペットショップでバイトをしている。恋は元々がペットショップで働いていたのだが。たしかオレがアルバイトを始めると言ったらなぜか一緒にするとか言っただけでなく、ずしみにあのアルモニアに来たのだった。

そしてオレ達は駅につくと言ったところで

「お？ 月達やん。偶然やなー」

「む？ おお。本当だな」

と、霞と真が駅前で切符を買っている所に出くわす。これで洛旬寮

組がそろった。

「今帰るか？」

「そやねん、今日は部活がはようおわってな。やる事無くてな」

オレは券売機にお金を入れながら霞に聞く。すると今日は部活が早めに終わったらしい。

やる事が無いって……健全な女子高校生かよ。まあ霞に健全を問うのは野暮と言う物だな。

「ほないこか」

「お前が仕切るな」

「ええやん、細かいなー夜雲はー」

ぶーぶーと唇を尖らせる霞。こういつたのをオレ以外の男にやればワラワラと男が良い寄るのに、と思うが口にはしない。

そしてオレ達は電車に乗り込む。



「…………ふう」

アレから紫苑さんの作った晩ご飯をこれでもかと言つぐらい食べたオレは、自室に完備された風呂に入ってから、寝巻に着替えて自分のベットに腰を掛けてタオルで頭を拭く。

今日はまあまあ充実した1日だった事をかるーく思い返してオレはタオルを肩に掛ける。

「ん？」

すると机の上に置いたケータイがバイブする。

そう言えばまだマナーモード解除して無かったっけ？

「ういーっす、三河屋ですよーっと」

ケータイをとりスライド式のケータイを耳に当てて冗談を言う。

え？ あ、すすすいません間違えました！

「ははっ、ウソウソ。オレであつてるよ」

ケータイの向こう側はオレの声に慌てて謝る。その電話の相手は桃香だった。

あつうっ…もう酷いよー夜雲くん

「わりいわりい。んで？　なんか用事か？」

謝りながらも桃香の慌てる顔を思い浮かべると微笑みが止まらない。

あ、うん。明日お買いものに行くんだけど、夜雲くんもどうかな、  
って？

「誰が行くんだ？」

えーっと、愛紗ちゃんに星ちゃん、鈴々ちゃんそれから雛里ちゃん  
と朱里ちゃん……あ、あと白蓮ちゃんも一緒だよ

「……ず、随分と多いな……　つか男はオレだけなんなんだな」

少し肩を落とし気味にオレはため息をつく。

あ、それなら一刀くんも呼ぶ？

「うーん、アイツかー……　そうだな。OK、んじゃ明日は何時集合  
だ？　それと一刀にはオレが連絡すつから」

それから少し桃香に明日の集合場所と時間を聞いて、しばらく談笑  
してから切った。そして一刀にメールで了解を聞いてベットに倒れ  
込み、ものの数分で眠りに落ちた。



### 3日目 バイトは楽しいもの！（後書き）

最近は部活が激しくてこっちに体力が使えなくてすいませんww

まあ今回は軽くバイト話？

そこで今回は蜀組数人と買い物です！

ではでは次回。 ノシ

4日目 人類最終兵器は家電だ……いえ、何でもありません…（前書き）

どうもザンです。

こっちは久しぶりに更新しますね。

では本編です。

4日目 人類最終兵器は家電だ……いえ、何でもありません……

本日は日曜日。昨日約束した通りオレは、駅へと来ていた。

「10時17分……少し早く来過ぎたか？」

オレは駅前の信号が青になるのを腕時計を見ながら待つ。そして赤が青に変わりゆっくりと歩き出す。そして集合の目印である”φ”型のオブジェ前を見る。するとそこには一刀が居た。

「うーっす、一刀」

片手を上げて挨拶した後に、軽く謝る。

「ワリーな付き合いませちまって」

「気にしないでいいぞ。どうせ今日は及川のナンパに付き合い合われることになってたけど。断るいい用事が出来たよ」

「そうか。それよりあいつらはまだなのか？」

一応周りをキョロキョロと見回す。

「うん、まだ。でもさつき「今出たから」って愛紗からメール来たし大丈夫だろ」

「あ、オレの所にも来てる。ま、これなら大丈夫だな、なんせ委員長だしな」

オレは笑いながら言う。一刀も少し困った様なそんな感じで笑う。それから程無くして……

「おはよ〜」

と言う声にオレ達は談笑を中止して振り返る。そこには美女が4人、美少女が3人と物凄く男冥利に尽きる話この上ない、”成春寮”組の女性陣が来た。

成春寮 フランチェスカの西地区にある女子寮。現在は10人が寮に住んでいる、その10人ともが学生である。洛旬寮と同じく管理人の人が居る、だがウチと違い基本は寮に住む人が自炊をする形である。

本当に余談だが、洛旬寮は北側西寄りの場所にある。なのでこの駅から徒歩で30〜40分程度で成春寮に着く。

「お兄ちゃ〜ん」

オレに突進して来る”赤い魔弾”（オレ命名）こと、風張 かざはり 鈴々（りんりん）。中等部3年生で愛紗達の居る武道部中等部の猛者である。独特の雰囲気と可愛い口調、明るく元気な性格も相まって学園での人気者。

「おっと。おうおう今日も元気だなー鈴々」

「元気一杯なのだ」

飛びついて来た鈴々を降ろして頭を撫でる。鈴々は丁度頭を撫でる最適の場所に頭があるのでついつい無意識で撫でる事がある。

「お、おはようございませゅ！ はうう、噛んじゃいました……」

「お、おおはようございませゅ……あうう……」

「おはよ、相変わらずだな」

はう、と言ったのが、諸羽<sup>もろはね</sup> 朱里<sup>しゅり</sup>。あう、と言ったのが、鳳桐<sup>ほうきり</sup> 雛<sup>ひ</sup>里<sup>なり</sup>。二人共中等部3年生で鈴々と同じクラス。朱里とは小等部1年生の頃からの付き合いで、雛里とは小等部4年生からの付き合い。フランチエスカの”伏龍鳳雛<sup>ふくりゅうほうすう</sup>”と言えばこの2人、と学園ではそれなりに有名である。

「「（はわわ……！／あわわ……！）」」

「ははっ、それも相変わらずだな」

オレは朱里と雛里の頭を撫でる、2人は慌てた様な声をだす。

「はあ、それくらいにしといてやれよ夏目」

ため息を吐いてオレの行動に釘をさすのは、公原<sup>きみはら</sup> 白蓮<sup>ばいれん</sup>。桃香から紹介された桃香の親友。特筆するべきところなし、が特徴。



「いま普通って言われた気がしたぞ……」

「き、気の所為だろ……それより、行こうぜ？　買うもんあるんだろ？」

「そうだな」

愛紗の言葉を皮切りにオレ達は駅内へと歩き出す。

「なんか納得できないぞ……」

「まずはどこから行くんだ？」

オレ達は電車で20分程揺られた場所、フランチエスカの中心地区である、店や会社が密集する区画の巨大なショッピングモール内へと入る。中に入ると、大きく”十”の刻まれたタイルに少し高級感のある造り、ガラス張りの丸いエレベーターのある内装、商品の置かれた棚には春物の最新のファッションや防犯グッズ、皮靴やスーツ、などが並んでいる。その中をそれぞれ喋りながら目的の場所へと向かう。

「それより何を買うんだ？」

「あ、うん。この前料理に失敗しちゃって、電子レンジ壊しちゃっ

たから」

桃香は可愛らしくペロツと舌を出して言う。こう言う仕草は似合うと言つか、可愛い、のだが料理で電子レンジが壊れたとは何を”合成”したのだろうか。

「そ、そうか。いつかオレにも何か作ってくれよ」

「え？ う、うん」

桃香は顔を赤くして俯いてしまう。

「わ、私だって料理くらいできます！」

するとそこに愛紗が入り込んでくる。

「いやっ知ってるぞ……ま、まあ機会があつたら食わせてくれ。し、しっかり味見してな……」

オレは愛紗の殺人料理を、中等部の時に初めて実食した人間だからな。  
ひげんたい

「はい」

「お前は勇者だな……」（こそ）

「愛紗を泣かしたら、愛紗のオヤジさんに殺されるかな……」（こそ）

「それでは私も秘蔵のメンマを御馳走して差し上げよう」

いつの間にかオレと一刀の会話に聞き耳を立てていた星は自慢げに言う。

「あ、それは遠慮するわ。ってか、お前が作ったワケじゃやねーだろ」

「orz」

ガツクリしている星を置いてオレ達は目的の場所、である家電製品売り場へと来た。

「んじやとつとと済ませて次行こつぜ」

そうして桃香、愛紗、白蓮、朱里、雛里は商品が並べられた方向へと行ってしまう。

「どうすつか？ オレは適当に商品眺めてるけど」

「俺も行くよ」

「私も一人では暇ですからな」

「鈴々はお兄ちゃんに付いて行くのだ」

と言って鈴々はオレの背中をよじ登り肩へとひっ付いて来る、所詮肩車をしている。

「んじや適当に見て回っかな」

オレは適当な電化製品を見始める。そこには、先端に人差し指くらいの大きさの円盤みたいな物が付いて居てギザギザしている、その先端から持つ所まで細い銀色のフォルム、持つ所は白く数個程のボタンがあつて、最後に尻尾の様なコードが付いている。

「これは、電化製品なのか？」

「ああ、ミキサーの進化版だよ、ほら先端に刃が付いてるだろ？  
そこでモノを砕くんのだ」

「ふうん、人類も進化したな」

「進化したのだ」

「お前等なあ……はあ……」

オレと鈴々は感心したように頷く、すると一刀が顔を抑えてため息を吐く。星は近くに蹲つづくまつて笑いを堪えていた。オレはそれを無視して適当にダラダラと家電を見て回った。

「んじゃ次は誰だ？」

「は、はいっ！」「」

アレから20分程して桃香は最新式の電子レンジを購入した。そして次の行く場所をみんなに聞くと朱里と雛里が手を上げる。ちなみに購入した電子レンジは成春寮に運ばれる事になっている。

「何を買ったんだ？」

「ほ、本でしゅ……はう……」

「焦んなくていいっての。時間はまだまだあつから」

オレは俯く朱里の頭を優しく撫でる。

「ま、本だな。んじや行くぞ」

そしてオレ達はショッピングモール東側にある本屋へと向かった。その途中……

「ん？ ……穏じゃねーか？ おーい！」

「……あゝ夜雲くんじゃないですかあゝ」

しばらく歩いていると、東側へ向かう途中、知り合いを見つけて声をかける。するとのんびりとした口調でこっちに手を振って来る。

「あれは？」

「ああ。孫美家繋がりの縁の人」

そう言つてオレは彼女へと近付く。陸上<sup>くがうえ</sup> 穏<sup>のん</sup>。フランチエス力大学の2回生で雪蓮と冥琳の後輩。将来の夢は作家らしい。

「どうしたこんな所で？」

服装は非常にラフな格好。それでいて女性らしさを引き出している。

「バイトを探していたんですよ。夜雲くんはどういった用なんですかあ？」

「オレはダチと一緒に買い物だよ。それよりなんでバイトなんだ？奨学金が出てたろ、足りないのか？」

記憶が確かなら結構な奨学金を受け取っていた筈。

「はい。ちよつと欲しいモノが出来ちゃってですねえ」

「ふうん。女の子は金が掛かるんだな」

オレは相槌を軽く打って頷く。

「それよりも、お友達と一緒に待たせていいんですかあ？」

「うーん、そうだな。悪かったな声掛けて。んじゃ頑張れよ」

「はい」

オレはそう言い残して一刀達の下へと戻った。それから少し穩の事について数十分問い詰められたが、特にこれと言って何も無い事を理解してくれた。



4日目 人類最終兵器は家電だ……いえ、何でもありません……（後書き）

うーん？

なんか不満が残る感じが、

こんな感じになりました。

次回は昼の部辺りです。

ではでは次回。 ノシ



5日目 買い物中の女の子はかしましい……？ (前書き)

どうもザンです。

最近は何だかPCに向かっていると眠くなりますw

では本編です。

## 5日目 買い物中の女の子はかましい……？

朱里達の買い物を終えた辺りで12時を軽く過ぎたので、オレ達はフードコートへと来た。時間帯的にも混んでいると思ったのだが。オレ達は意外とすんなりと席を確保することができた。そしてそれぞれ思い思いの料理を求めて、一旦解散する。

「いただきますっ」と

一足先にオレは手を合わせて、食べ物への感謝をしてからスプーンを取って食べ始める。今日のオレの昼は、”ふわふわチーズオムライス”のセットのメインである、文字通りいふわふわと黄色い卵、その上に白い溶けたチーズのオムライス、揚げ立てのポテト、そしてウーロン茶と言う何とも旨そうな物だった。

「……………うまっ！」

じっくりじっくり咀嚼してから感想をある程度のボリュームの音量で言う。幸い近くに座る他の客はフードコート独特の喧騒で聞こえ

ていな様だった。

「いただきます」

すると隣から声が聞こえる、オレは当たり前前の様にそっちを見る。  
するとそこには星が……

「いつも通りだな」

星とこんもりと、どっさりと、もりもりと椅子に座る星の頭を超す  
勢いの大量の茶色いモノ      メンマののったラーメンを見て、そ  
う呟く。

星は生粋の快樂殺人鬼並みに、本能で動く獣並みに、メンマ大好き  
な少女なのだ。

「ってか、どうやって」

そのメンマ山を崩さずにここまで持って来たんだよ。ものすつごく  
気になるし、物凄いい見られてる。

周りを見ると、料理を運ぶトレイを持った通りすがりの老若男女か  
ら、座って食事していたお客、はたまた店の店員さんまでも、星の  
前にあるメンマをガン見している。

「ったく。お前の胃にどれだけ入るんだよ……」

そう呟いてオムライスを一口食べて。

いかん、見てたら”コレ”が食えなくなる。

それから無我夢中でオムライスをかつくらう。しばらくして食べ終わったトレイを片付けに行く。すると朱里と雛里の姿が見えた。

「朱里、雛里」

「あ、夜雲さん」

オレはトレイを片手でぶら下げる様に持って、2人の名前を呼んで近付く。

「どうした、まだ決まんねえのか？」

「い、いえ。決まっているんですけど……はう……」

歯切れ悪く朱里は恥ずかしそうな声を出してシュンとなる。オレはその理由がわかると、朱里と雛里の頭を兎に角撫でてやる。

「元気だせつての。オレも一緒に居てやんよ」

2人は極度の緊張に弱い、世で言う”恥ずかしがり屋”なので、こう言ったゴミゴミとした人ごみは1人では怖くて歩けない、と言う萌ポイントを有しているのである。何とも可愛らしい事この上ない。

「……はう……」

「……あう……」

オレは一旦トレイを片付けてから。朱里を左手、雛里を右手に手を繋ぎながらそれぞれの列へと並ぶ。それから数分で料理を受け取っ

てから確保してある席へと戻る。

「……良く食うなあ……」

オレは感心しているんだかいなんだか、そんな良く解らない顔で、自分から右斜め前に鈴々の居る場所を見る。そこには嬉々とした表情で無我夢中に丼を掻きこんだり、啜ったり、飲んだり、噛んだりと忙しそうにメシを食べている。

「ま、鈴々らしいっちゃらしいな」

オレは肩肘を机について割と嬉しそうな表情で笑う。

昼食も滞りなく（鈴々が大量に食べた以外）終了して、女の子ほぼ全員の行きたい場所であるところの、ファッションのある一角へと来た。当然の如くここ4階全てが女性物のフロアなので、男は居心地が悪い。そんな場所で女の子たちは気にする風も無く、キャイキャイと言っ感じに嬉しそうな声を出しながら買う服を吟味している。

「ふう……」

「はあ……」

オレと一刀は当然その集団に入る勇者ではないので、店の前に設置されたベンチでダラツと座っている。

「そう言えばさ、お前この前の中間どうだった？」

唐突に一刀がオレの方に顔を向けて聞いて来る。

「ああ、あれな……。えーっと……壊滅的とだけ……」

「ははっ、予想通りだな……」

苦笑いの一刀に、お前は？ と聞いて見ると。

「そうだな、平行線上かな？」

「お前も変わらねえな。そう言えば、恋は珍しく勘かやまかが当たって全部80点台取ってな。あれは凄いぜ……」

「それは天文学的数字じゃないの？」

「そうかもな。…そうだ、華琳はどうだったんだ？」

「予想通りなんじゃない？」

「ま、流石は生徒会長候補の有力株だな」

オレは頷きながら視線を目の前の店へと向ける。当然そこには桃香達が服を持って、可愛いとか、愛紗ちゃんに似合うかもとか言っただけで現代女子高生の模範を示している。それが少し微笑ましくてオレは頬を緩ませる。

「顔がエロいぞ……」

「オーケー一刀、貴様とは一度身を持ってオレと言う存在を教え込んでやるっ……」

肩を回しながらベンチから腰を上げて構えを取る、全神経、全筋肉を一撃に込める様に構える。

「その腐った脳みそをブツ殺す!!」

そして閃光の様な一撃を放つ。

「……ぐふっ……」

「ふん。腕が落ちたな一刀」

そう言って、一刀（と言う名の屍）を背景にガッツポーズをとる。

「終わったよ……ってなんじゃこりゃー!?!」

桃香が大きな目の紙袋を持って嬉しそうな笑顔を浮かべて来たかと思うと、後ろに居る一刀を見て驚いた表情になる。そしてそのまま可愛い声で絶叫する。

どうやら一刀との死闘（一方的なリンチ状態）を繰り広げている内に、女性陣は買い物を終了させてしまったらしい。

「気にするな桃香、必要な犠牲なんだ」

「え？ え？ う、うん」

オレの冗談を本気で受け止めている辺り、桃香は詐欺に容易に引っ掛かるタイプであることがわかる。……とつくの昔に知っているのだけ。

「……一刀、帰宅部に負けるとは……これは”特別メニュー”だな」

そう呟く愛紗。特別メニュー？ はて何があるんだろう？

「特別メニューとは、愛紗が考案した三日三晩の断食、その三日間は”木鉄拳mk2”との連続18時間の鍛錬をする事ですな」  
もくてっけんマークツー

オレの心を読んだ様に説明をする星。

「心を読むな」

「いえ、そう顔に出ていたものですから……」

「オレは今無表情だった」

「愛の力です」

手を頬に添えて嘘っぱくポツと赤くなる星。

「はっ」



それを鼻で笑ってやる、すると星は膝をついてオーバーリアクションとも言えるポーズをとる。

「orz」

「……ま、説明は感謝。分かり易かったぜ」

オレはそう言って微笑みながら手を差し出す。すると星は顔を背けながらもオレの手を取って立ち上がる。

「これで最後だよな。んじゃ帰るか」

するとまばらに、それぞれが返事を返してくれる。こうして本日の買い物を終了した。

アレから電車で揺られながら帰ったオレ達。電車の中では数人（鈴々・桃香・愛紗・雛里）は寝てしまっていた。オレの両肩を占領したのは雛里と桃香だと言うのは蛇足だ。

電車が待ち合わせた駅に着き改札を出てからオレ達は別れた。それからしばらく行った場所にあるコンビニへと入った。

「今日は詠とねねの当番だっけ。ま、珍料理は出来んだろ」

そう言ってコンビニに常備されているカゴを手にとってから飲み物

コーナーへと行く。そしてジンジャーエールの大きな目のペットボトル、同じ大きさのオレンジジュースとウーロン茶をカゴに投げ入れる。

「ん？ 霞からだ……ってこれだけですか……」

次にお菓子コーナーへ行こうと身体を回転させた時、ケータイからピロピロと警戒な音楽が流れる。ケータイをポケットから取り出しディスプレイを見るとメールが一件来ていた。開いて見ると霞から短文で”ジンジャー”と書かれていた。

「”購入” っと」

こちらも短文で”購入”とだけ打ちこんで送信する、送信完了の文字が出てから直ぐにケータイをポケットに押し込む。

「……もう一本買っとくかな」

オレはお菓子コーナーに向けて居た身体をまた回転させて飲み物の棚からジンジャーエールをカゴに入れる。そしてお菓子コーナーへ向かう。そして適当に、尚且つ、吟味しつつお菓子をカゴに投げ込んで行く。

「こんなもんか」

意外に多くなっちゃった、と呟いてまあいいかと思いレジで会計を済ませる。そして洛旬寮へとゆっくり歩いて行く。明後日には通学路として使う事になる、夕焼けが綺麗な坂道を登り。平坦な住宅街を抜けてから寮に着いた。

「ただいまー」

明日は美羽ちゃん家にも行くかな。

5日目 買い物中の女の子はかましい……？ (後書き)

今回は前話のつづきでした。

こんな感じで良かったんだろうか？

って思いますけど、大丈夫でしょう！

と言う何処ともなく湧き出る自信を信じて投稿しましたw w

ではまた次回。 ノシ

## 6 日目 豪華な屋敷は迷路と同じ（前書き）

どうもザンです。

いやーっ、こっちは久しぶりの更新ですね。

お待たせしてすいません。まあ待ってる人が居るのかは不明ですが

……

では本編です。

## 6日目 豪華な屋敷は迷路と同じ

袁道寺家・曹乃崎家・薊家      これら3つを御三家と呼ばれる。  
御三家は江戸時代から続く日本を支えて来た家系。その権力は江戸時代から現代に至るまで衰亡する事無く興隆し続けて現代社会を大きく支え活躍している三つの家系である。

その御三家の二家とオレは大きな繋がりを持っている。まずは”曹乃崎家”だ、曹乃崎家の次期後継者である曹乃崎華琳とオレは幼馴染なのだ。そしてその曹乃崎家を江戸時代から守護して来た家系こそがオレの苗字にある”夏目”なのだ。

夏目家は代々曹乃崎家を護り繁栄を支えて来た影の功労者。そんな歴史ある家系にオレは家族として迎え入れられている。元々夏目家は宗家と分家があり、オレはその分家の者として家系図に記されている。

そしてオレには両親が居ない。父親はオレが生まれる前に事故で他界、母親もオレを生んで数ヶ月して他界。元々母は身体が弱く子供を産める身体では無かったらしい、だが母たつての願によりオレは出産され、分家最後の者となった。

だが戸籍上でオレは、宗家の現党首の妻の”息子”となっている。コレは夏目家に代々忌まわしき伝統（のうい）が関連しているからである。

その伝統（のうい）とは夏目家は宗家と分家の一族間（いちぞくかん）でのみ　子を為す、と言う現代の法律を逸脱した伝統（のうい）を交しているのだ。一族でのみ子を為すことで種としての高い力を得る、とか何とかそんな独自理論を信じ、現代までその伝統（のうい）を守っている。

だから分家最後の一人であるオレを宗家は自身の次期後継者である娘の春蘭と秋蘭のどちらかとくっ付ける事に執着している。だからオレはそんな伝統（のうい）が嫌で家を離れ寮で暮らしているのだ。

閑話休題。

もう一つの繋がりがあるのは袁道寺家である。袁道寺家とは華琳の付添いとして六歳の頃に袁道寺家主催のパーティーの席で出会ったのだ。その頃のオレは世辞としても社交的とは言えなかった、だが特別人見知りとい訳でもなくただ華琳に腕を引かれながらパーティー会場を連れ回されたのだ。

そんな時にオレは華琳に紹介されて袁道寺麗羽に出会った。華琳の幼馴染だったからか、歳が同じだったからなのかよく解らないが、麗羽とは直ぐに打ち解けられた。それからは麗羽にある程度気に入られて良く遊ぶ（と言う名の無理無茶をさせられた）事が多くなった。

そんな時に袁道寺家へと華琳が招待された時オレもくっ付いて家。否、屋敷へと来た。その時にオレは麗羽の従妹である美羽と出会った。その頃はまだ生まれたばかりで遊ぶと言うよりも世話をしてや

った。

それからだろう、オレは時折こんな手紙を渡されることがある。そして袁道寺家の広い屋敷へと足を運ぶ。ちなみに敷地面積は東京ドーム三つ分と言っただから凄い（怖い）。

「いつ見ても無駄な歓迎だな……。何処のパーティーだよ……」

オレは愚痴を零しながら寮から駅と徒歩で来た袁道寺家の門の前に掲げられている、”夏目夜雲歓迎！！”の文字に顔を手で覆う。それと……

「ココに来るのも久しぶりね」

「ええ、そうですね華琳様」

「サッサと行きましょう華琳様！」

「……ご飯……」

「恋殿もう直ぐただ飯が食えるのです！」

「ぎょーさん居るなあ。まあ騒がしい方がウチは好きやけどな」

「ふむつ。ここが彼袁道寺家の屋敷か。威風堂々とした佇まいだな……」

「はあ……。少しは協調性を持ってないのかしら？」

「詠ちゃん、門大きいねえ……」



「んでお前等まで来てんだよ……」

オレは後方で姦しく騒いでいる女子の軍団へと視線を向ける。其処には華琳、姉さん、姉貴、恋、ねね、霞、真、詠、月が居る。華琳達は分からなが、洛旬寮組は確実にオレを尾行して来たに違いない。そんな女子集団にオレは物凄いため息を吐いて疲れた様な表情をつくる。

「あ、あのすいませんでした…。私達も今日は予定がなくて、それで……へう……」

月がオレの正面に来てペコペコと頭を下げながら理由を言う。うう、その他人を労わる気持ちだけでオレには癒しになる、それに何でも許しちゃうぜ。

「まあついて来たならしゃーね。このまま帰すのも何だから今日だけ特別だぜ?」

オレはなるべく緩んだ顔をしない様な顔で月の頭を撫でる。すると月はへうと言って俯いてしまう。そんな姿にも僅かながらの癒しを感じてしまう。

「だらっしゃー……!」

「じぼっ!?!」

まあ一瞬にしてブチ壊されたが……。

「月に触るなって言ってるでしょっ！ エロ魔人！」

「…………お、オレが何を…………した…………」

折角オレが尾行の事を水に流すって言うてるのに、脇腹に鋭い蹴りを放って置いて敵意むき出すとか、なんと言っ悪鬼で暴君な軍師様だ…………

「ふん！」

「ぐべっ！？」

再度オレの鳩尾に鋭い一撃がクリティカルダイナミックヒットする。それはもう、オレの頭上に文字で書かれるぐらいに。

「も、もうダメぽ…………」

「や、ややや夜雲さん！？」

オレは意識がある内に指で地面を削りながらダイイングメッセージを残す。犯人はメガネツンデレ、と。

「死ね！」

「がぶふっ！？」

「はぁ……とんだお家訪問だぜ……。オレの周りには暴力的な女（若しくは喧しい、姦しい、体育会系）が多過ぎる…オレの身体が持たん……」

場所は変わり、オレは一人で美羽ちゃんの屋敷の一室のベッドに居る。どうやら無事に屋敷内に入れた様である。運んでくれたのは恐らく姉二人が恋、それが霞、真の誰だろう。後でお礼をいわねえとな、と考えつつオレはベッドから出る。

「うぐつ……。…ったく…さっきのダメージもまだ抜けてねえ。…少しは手加減しろつての……」

まだ鳩尾辺りに変な違和感があり、胃の中の物が出てしまいそうになる。だがそれはどうあっても避けたい。何せ今日は月の作つてくれた朝食を食べたのだから。こんな場所で吐くなど、神にお祈りする筈が、江頭2：50に祈る様な物だ（例えば今一分かりにくい気がする）。

「にしても、やっぱり広いな……」

毎度毎度ココに来るたびに思うが、一部屋が尋常じゃ無いくらい広い。プライベートルームにしてもデカ過ぎる。しかもシャンデリアまである。

「にしても……窓から森が見えるって……変わってねえな……」

屋敷までの道のりは2、3時間かかる。そして屋敷の周りは全て木で埋めつくされている。偶にココは学園内なのか？と疑う事がある程の広さと木の数だ。

「さて、そろそろ行くか……」

オレはのびをしてから部屋の両開きのドアへと近付きノブをしつかりと握ってドアを開ける。すると其処にはメイドが4人並んで立っていた。そしてオレを確認すると綺麗なお辞儀をする。

「お嬢様がお待ちです。こちらにどうぞ」

「お、おう……」

前にもこう言う事はあったが流石に慣れる程の回数はされていないので、オレは若干ともりながらメイドに言われるがままその後ろについて行く。

しばらく非常に長い装飾が其処ら中に施された廊下はなんだか居心地が悪い。良く解らない絵があったり、高級そうな壺やら花瓶、古そうな西洋の鎧、床には高そうな赤い絨毯。

「オレには別世界だぜ……」

「何かおっしゃられましたか？」

オレのポツリと呟いた言葉に前を歩くメイドが聞こえたのか足を止め、オレの方を向く。

「あ。いやっ、なんもねえっす……」

「そうですか？」

そう言つてまた歩きはじめるメイド。オレは若干その場に固まつてから、またメイドの後を早歩き気味に追いかける。

またしばらく歩き1つのドアへとオレは案内された。今までと同じ様な装飾が施されているのに、このメイドたちはどうやって見分けているんだ？ オレはそんな事をふと思つた。

「お入りください」

「え？ あ、ああ……」

普通ここはメイドが開ける物なんじゃないのか？ と思いつつオレはドアに手をかける。まあ本場のメイドはこう言つものなのか。と思ひオレはドアを開けた。

「お兄さーーーーまーーーーっ!!」

「ぐがはっ!？」

オレの鳩尾に黄色い何かがめり込む。言わずもなからの展開である。オレは女の子に鳩尾をぶち抜かれる様な呪いでも掛かっているのだろうか？ などと疑いたくもなると言ふものだ。

そしてお約束通りオレの意識は無くなった。



## 6日目 豪華な屋敷は迷路と同じ（後書き）

今回は美羽ちゃんの屋敷に到着。そして何故か＋で数人がひっ付いて来た、という展開に…。

今回も前後半に別れますので、多分またしばらく待たせてしまう事になりそうです。

ではまた次回。 ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8426r/>

---

真・恋姫＋学園～夏目のドキドキ学園生活～

2011年8月2日10時43分発行